

文化

「これはサッカーではない……」。1993年、スコットランド・カークウォールでのクリスマス。初めて目の当たりにした「民俗フットボール」に球を蹴る動作はほとんどなかった。気温は零下、300人が押しこらまんじゅう状態のスクラムから湯気が立つ。

町の山側生まれ「アッピース」は城跡の民家の壁、海側出身「ドゥーニーズ」は船着き場の海がゴールだ。ゴール間の距離は約20m、自陣へボールを運べば勝利という1点先取の熱闘は約6時間続き、このときはドゥーニーズが勝った。勝利チームから一人の「勝者」が決められ、選ばれた者にボールが贈呈される。

民俗フットボールは中世以降、英国各地に存在した土地固有の球技だ。サッカーやラグビーの起源といわれている。だがカークウォールのゲームが示すように、その内実は近代スポーツとは大きく異なる。明文化されたルールもユニホームもなく、審判もいない。イン

英民俗球技はノー・ルール

◇各地に固有の「フットボール」、四半世紀で全て調査◇ 吉田 文久



スコットランド・カークウォールでのゲームの様子(2013年)



グラントの10カ所、スコットランド7カ所でも行われ、私は25年間かけて全てを見て回った。なぜ四半世紀もかかったかといえば、開催日が重なるからだ。多くは年1回、教会歴の「告解火曜日」に行われる。復活祭の日によって変動するが、毎年2〜3月だ。大学教員の自分にとっては入試や新年度の準備で忙しい時期でもある。

私の専門はもともと体育科教育学。サッカーの教材的価値はその戦術や戦術にあると考えていたところ、スポーツ文化研究の泰斗、中村敏雄先生から「もっと文化性があるのでは」と指摘する手紙を頂戴した。同時期に当時の同僚からカークウォールのゲームを聞き、サッカー文化を探る意識

で民俗フットボールの調査を始めたのだ。存続する地域が当初から判明していたわけではない。先行研究者の情報に加え、2000年から1年間、留学先のエジンバラ大学スコットランド研究所で資料を渉猟した。研究員の助けや現地人の証言、地元紙で存続を確認していった。

面白いのは当事者たちは普段サッカーやラグビーをプレーし、それとは別物として民俗フットボールを楽しんでいることだった。英国には、野蛮で無秩序な民俗フットボールから近代のスポーツへと、歴史の連続性のなかで両者を語り、対立させる先行研究もある。だがどうも実像と異なる。

確かに民俗フットボールの転機は産業革命であり、淘汰の要因となった。都市への人口流出により地方ではプレーヤーが不足し、反対に人口が膨らみプレー空間を失う地域もあった。

衰退の一方、存続のための手立ても施される。たとえば人口が増えたイングランドのアニックでは、ゲーム空間を町の中から空き地に移した。地域によっては時間制限を設けたり、住民による運営委員会が生まれたりと、むしろ近代スポーツの特徴も取り入れながら多様化しているのだ。

民俗フットボールには地域に誇りを持ち担い手

を育てる機能がある。同時に、自分を律し相手を尊重する「コントロールされた暴力」のなかで、身体的な交流が育まれているのではないか。スポーツの商業化が進み複雑になるなかで、スポーツ本来の楽しさを考えるきっかけにもなろう。

一連の考察を「ノー・ルール！」(春風社)にまとめた。8回訪れたカークウォールのゲームも詳述したが、現地では「実際にプレーしないと理解したことにはならない」と言われてしまう。ケガをして帰れなくなると困るのだが、どうしたものか。(よしだ・のりひさ || 日本福祉大学教授)